

## 里見純吉の「愛と真実」と Rogers の “Empathy” と “Genuineness” ; 栄養教諭が生徒指導・教育相談において求められる姿勢

永島 聡

栄養教諭養成課程を有する短期大学の創立者である里見純吉は、「愛と真実」をその建学の精神としている。一方臨床心理学者 C. R. Rogers は、“empathy” と “genuineness” をカウンセリングが有効に機能するためのセラピスト側の条件として提示している。拙稿においては、里見の思想を Rogers の理論で裏打ちすることで明確化し、さらに栄養教諭が生徒指導・教育相談場面で持つておくべき姿勢は「愛と真実」であることを確認する。

キーワード；里見純吉, 愛, 真実, Rogers, empathy, genuineness

### 1. はじめに

筆者は以前、栄養教諭の持つておくべき姿勢について、次のように述べた。

「栄養教諭は、食育を担う者として子どもたちの人生に直接的に関与していく職業であり、その責任は重大である。よって、専門的な知識、方法論や技法論を超えて、そもそも栄養教諭は何のために存在するのか、生身の人間としての子どもたちとはどのような存在なのか、子どもたちの人生とは何なのか、といったことに哲学的に疑問を持ち、問い続ける素養が必要であると考え。生身の大人として生身の子どもたちと出会い続けるのに、栄養教諭としての哲学がなく、ただ単に専門的知識、方法論、技法論だけを持つて接し続けるのであれば、容易に AI に取って代わられるであろう」<sup>(1)</sup>。

栄養教諭とは、児童生徒が人生の基盤を作るべき人間形成の場において、「食」ないし「食育」という人間が人間として生きていくことの根源に関わり続ける仕事である。それを目指す学生は、栄養学における自然科学的な理論を専門知識として獲得すること、それを用

いて栄養指導等を試みるための方法論を習得すること、これらはもちろん栄養教諭になるためには必須である。しかしながらそれらにも増して、そもそも人間とはどのような存在なのか、人生に意味はあるのだろうか等々、哲学的に悩み考える素養が必要なのではないだろうか。食という人間存在の根源に関わりつつ、児童生徒が長い人生を悩みながら生きていくための基礎づくりをしていく場で彼ら彼女らに寄り添うものとして、その哲学的な姿勢を養っていくためのいくつかの拠り所のうちのひとつとして、里見純吉の思想を以前検討したのである<sup>(2)</sup>。里見は栄養教諭養成機関である短期大学の創立者であり、その思想を振り返り検討することは、現在その教育機関で栄養教諭を養成する教員にとって必要なことであると考えての考察であった。

里見の思想の根幹であり、短期大学の建学の精神となっているものが「愛と真実」である。里見は「学園に來り学ぶ者は、知識や技能よりも、その第一に“良い人間”になることを心がけねばならない」と、人格教育の建学の精神を説き、「愛と真実こそ“良い人間”

になるための根本で、真の愛は好き嫌いを超えて人を愛する大きな愛（アガペー）であり、真実とは相手を思いやり、人を偽らないことである」との教育理念を述べている<sup>(3)</sup>。以前筆者は里見の思想について、精神医学者であり哲学者である V. E. Frankl の人間思想をもとに裏打ちを試み、心理学者である C. R. Rogers のカウンセリング理論を用いて栄養教諭が持つべき教育相談的姿勢について論じた<sup>(4)</sup>。今回拙稿においては Rogers の観点から、里見の「愛と真実」についてさらに考察を深めたい。

## 2. 里見の「愛」

### 2.1. 里見にとって「愛」とは

里見にとって「愛」とは何だったのであろうか。「人間の価値 続講」において彼は以下のように述べている<sup>(5)</sup>。

動物にも母性愛的なものはあるが、それはただ単に繁殖のためである。餌を取ってきて与える等子どものために尽力するが、それは本能からくるものであり、子どもが大きくなれば特に愛情らしきものもない。一方で人間は高い知能を持っていて、他の動物とは違って複雑で計画的な営みが可能であるが、自分の生命維持、子孫繁栄のための営みは、動物としての本能が知能を通して複雑に計画的に表現されているに過ぎない。生存競争、階級闘争、国家間の闘争であっても、これらは他の動物にも見られるものである。「成金が富を振りまわすのと、学者が知識を振りまわすのと」<sup>(6)</sup> 一緒であり、やはり動物的である。

では真に人間的なあり方とは何か。「優れた知識を有する人は、その能力を人の為に費す」<sup>(7)</sup> ことができる。ただ人間だけが他人に「同情」し「同感」することができる。「惻隠の情、人の痛さを知る情を、愛という言葉で表現する」<sup>(8)</sup> のである。人間愛、隣人愛にこそ価値があるのである。ここで愛とともに、不正に対する憤りの心として、「正義感」

についても述べている。同情心や正義感は人間のみが有する価値であり、優れたあり方であると言う。

そして世界が平和に共存共栄していくためには（これが書かれたのは終戦直後である）、自己中心的、自国中心主義であってはならない。自己中心であると、国際的には国家間の闘争、国内的には階級闘争を招く。他者のために役に立つことを目標にしなければ、世界平和は実現できない。

社会においても人のために役立つことをすべきである。自己が優れたものを持っているのならば、それを他者のために使わなければならない。富の蒐集に優れた人は、その能力を他者のために発揮すれば、社会は良くなるのである。

我が国は戦争により大都市が破壊され、貧しい国となった。よって物質面で他国に貢献することはできない。「しかし人間としての在り方に於て、優れたものになるならば、それは世界に対して貢献することになるのであります。そういう良い人間に成っていること自体が、世界に貢献することになります」<sup>(9)</sup>。以上のように里見は「人間の価値 続講」において「愛」について述べている。

### 2.2. 里見における「アガペー」と「隣人愛」

ところで前章において述べたが、里見はその教育理念における「愛」について、「真の愛は好き嫌いを超えて人を愛する大きな愛（アガペー）」であると言っている。また前節において、里見は「惻隠の情、人の痛さを知る情を、愛という言葉で表現する」とし、人間愛、隣人愛にこそ価値があると考えている、ということ为先述した。これらアガペー、隣人愛、惻隠の情の関係性について考えたい。本節でまずは、アガペーと隣人愛について検討する。

#### (1) 無条件の愛

『新約聖書』マタイによる福音書5章「山

上の説教」の中で、43 節から 48 節において次のようにある。「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるだろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」<sup>(10)</sup>。

ここで、愛は無条件であるべきであると言っている。神は人間がどうあっても、善人であっても悪人であっても、条件をつけずに愛するのである。神がそうするように、人間も、相手が自分にとって有益か否かにかかわらず、等しく愛することが望まれるのである。条件つきで他者を愛することなど、誰でもできてしまう。しかし神に無条件に愛される人間にとって、そのように他者を愛することが良いことなのである。

## (2) 無償の愛

また『新約聖書』ローマの信徒への手紙 5 章 8 節では次のようにある。「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」<sup>(11)</sup>。

子なる神としてのキリストは人間が罪人であったとしても、すなわち愛されるに値しないような存在であったとしても、自己犠牲的に愛した。罪人であり立派でない存在であるが故に、神に愛されたとしても、神に対して何をするわけでもない。しかし、神は無償の

愛を人間に与えるのである。

さらに『新約聖書』ルカによる福音書 14 章 12～14 節では、次のようにある。「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」<sup>(12)</sup>。

貧困や障害を抱える人々に何かを施したとしても、施された人々はそのお返しをする力はない。見返りは期待できないのであり、見返りが期待できない機会に遭遇できたことに感謝しなければならないのである。ここにも無償、無報酬の愛が描かれている。

## (3) エロース・フィリアとの違い

アガペーは「愛」と訳されるが、同様に「エロース」「フィリア」も「愛」と訳される。これらはどう違うのか。『キリスト教神学基本用語集』の「アガペー」の項目において、次のような内容で書かれている<sup>(13)</sup>。すなわち、「エロース」は欲されているもの、美しいもの、愛にふさわしいものに対する愛であり、愛されているものを所有しようとする愛である。一方「フィリア」は、典型的には友人の間に存在する愛であり、賞賛や親密さに基づくことが多い。しかし、「第一に、被造物と人類への神の愛を指して、次いで、神の愛の反映およびそれへの応答としてのキリスト者の愛を指して新約聖書がほぼ一貫して使っているのが、アガペーである。『エロース』とは非常に対照的に、また『フィリア』とも対照的に、アガペーは愛されているものがその価値があるという理由で、あるいは愛されているものを所有しようとして、愛するのではない。それは、われわれに対する、対象のふさわしさを問わない、神の愛である。それは所有しようとするのではなく、[対象を]より良くさせ、祝福し、幸いを授けようとする愛である」<sup>(14)</sup>。

エロースは、愛されるにふさわしいものに対する愛であり、愛されるものを所有しようとするものである。これは無条件の愛ではないし、無償の愛でもない。条件つきであり、見返りを求めていると言える。フィリアは、対象が仲間内であり、そこには賞賛や親密さがあることから、やはりエロースと同様、無条件でも無償でもないだろう。自己中心的であると言ってもいい。

#### (4) 里見の「アガペー」と「隣人愛」

(1)～(3)において、里見の重視するアガペーと隣人愛とは何か、適切に理解するため、新約聖書におけるアガペーの検討をしてきた。加えて、エロースとフィリアとの比較もした。

アガペーとは、キリスト教における、神の人間に対する愛である。これは無限の愛であり、無償の愛である。神が見返りを求めることなどない。そして神に愛されている人間同士は、神に愛されているように、互いに無償の愛を捧げ合うことが望まれている。これを隣人愛と言う。これらの愛は他者に対して他者のために無意識的に捧げられてしまうものである。愛するものと愛されるものとが共に苦しみ、場合によっては結果的に愛するものの自己犠牲を伴うこともあるのである。このアガペーとそこから派生する隣人愛は、里見の教育理念の根幹である。

### 2.3. 里見における「惻隱の情」

では里見の重視する孟子の概念「惻隱の情」とは何か。

#### (1) 他者のために何かを無意識的にしてしまうということ

『孟子』における、惻隱をめぐっての記述には、例えば次のようなものがある。「公孫丑章句 上」によると、「なぜ人にはみな人に忍びざるの心があるというか」といって、今かりに突然幼児が井戸に落ちようとするのを見れば、だれでもはっと驚き深く哀れむ心持

ちが起こって助けようとする。それは子供を救ったのを手づるに、その両親に交際を求めようとするからでもなく、村人や友人にほめてもらおうとするからでもなく、見殺しにしたら悪口を言われて困るというので救うのではない。利害得失を考えた結果ではなく、反射的にすることだ」「これによって考えてみると、傷ましく思う惻隱の心がないのは人ではない。同様に不義不善を恥じ憎む羞惡の心がないのは人ではない。他人に譲る辞讓の心がないのは人ではない。是非善悪を判断する是非の心がないのは人ではない。この惻隱の心は仁の萌芽であり、羞惡の心は義の萌芽であり、辞讓の心は礼の萌芽であり、是非の心は智の萌芽なのである」<sup>(15)</sup>。

他者の立場に身を置いて他者を憐れむのが、惻隱の情である。上記で孟子の提示する例では、困っている他者のために、支援を無意識的に実行してしまっている。アガペーと同様、見返りや賞賛を求めず、無条件に無償の愛を瞬間的行動で示している。そして、これができない人間は、もはや人ではないのである。

#### (2) 性善説と意志の力

また『孟子』には次のような箇所もある。「告子章句 上」での告子との論争において、孟子は次のように言う。「人間の本質はといえば、善をなすはずである。それが私のいう性善の証拠である。ところが、不善をなすことがあるのは、物欲に覆われて私心はその本性をそこなうからであって、性の能力である才の責任ではない。もう少し説明を加えると、人間はだれでも惻隱、すなわち人の不幸を哀れむ心、羞惡、すなわち不正不義を恥じ憎む心、恭敬、すなわち慎み敬う心、是非、すなわち是非を判断する心、を持っている。その惻隱の心は仁の徳の発露であり、羞惡の心は義の徳の発露であり、恭敬の心は礼の徳の発露であり、是非の心は智の徳の発露である。つまり、仁義礼智の徳は、めっきのように外

から我が心を飾りたてるものではなく、自分が元来心に有するものなのである。世人はそれを考えないまでだ。ゆえに、私が言うように、心の徳はみずから求めれば得られるが、ほっておけば失ってしまうもので、いったい、善悪、賢愚の差が二倍にも五倍にもなり、計算もできぬほどになるというのは、みずから求めずに、固有の才を十分に発揮することができないからなのである」<sup>(16)</sup>。

元来人間は善なる存在であり、惻隱の情も自然に発揮されるものである、と孟子は考える。性善説である。惻隱すなわち人を憐れむ能力を元々持っている。そして、誰か困った人がいれば、その人のために何かできることをやろうとしてしまう力がある。しかしながらそれができない場合がある。能力を適切に発揮できない理由、例えば物欲に囚われたり、自分の利益に走ってしまう何らかの刺激に抗えなかった時、惻隱の情が覆い隠されることがある、ということである。あるいは油断していた時、惻隱の情は失われる可能性がある。これらを失わないため、誘惑に抗うには、意志の力が必要になってくると考えられる。あるいは他者を支援できる場面に遭遇した時、それを適切に実行するにも、意志の力が必要な場合があろう。いずれにせよ、惻隱の情のもと、誰かを支援するとき、無意識的に実行してしまうことが基本なのかもしれないが、意識的主体的に、自由意志のもと、何らかの行動を取る、ということも劣らず重要であると言えそうである。

このことに関連するが、『中国思想基本用語集』の「性善説」の解説は、次のように書かれている。「人間の本性は善であるという考え。戦国時代の思想家である孟子は、人には生まれつき惻隱（あわれみ）・羞惡（不正を恥じる）・辞讓（譲り合う）・是非（善悪の判断）の四つの心（四端）が備わっていると、それぞれを拡充することで誰でも仁・義・礼・智の四つの徳を身につけることができる

とした。また、人は学ばずとも善を判断（良知）し実行する能力（良能）があることを性善説の裏づけとした。性が善であるにもかかわらず悪に走ってしまう理由については、後天的な欲望の心が善なる本性を覆い隠してしまうからだとする」<sup>(17)</sup>。ここを見ても、孟子にとっての人間は、元々が善であるが、それが覆い隠されてしまう時があり、その時はやはり、意志の力で抗うことができる、ということなのであろう。

### (3) 里見の「惻隱の情」

(1)～(2)で里見の重視する惻隱とは何か、適切に理解するため、『孟子』の当該箇所等に当たってきた。

人間には誰でも良心の四つの働き、すなわち四端の心がある。そのうちの「惻隱」とは、他者の不幸を憐れむ心である。幼い子供が井戸に落ちそうになった時、そこに居合わせた人は思わず損得勘定なしに自然に無意識的に助けようとしてしまう、といったものである。

人間が学び努力してこの四端を拡充していくことで、仁・義・礼・智という四徳に到達する。「惻隱」は「仁」の端緒、すなわち惻隱を伸ばすことで仁に到達することが望ましいのである。

この「惻隱の情」においても里見は、困っている人に対して、見返りを求めず無償の愛をもって、無意識的に他者を愛し支援してしまうのが人間のあるべき姿であると考えていると言える。「仁」について直接的に述べているわけではないが、支援の対象は家族や身内だけでなく、広く人間全てであり、人間愛を念頭においているものと言っていいであろう。

## 2.4. 「アガペー」「隣人愛」「惻隱の情」と Frankl の「自己超越」との関連性

里見にとって「愛」とは真に人間的なものである。そしてそれは、自分がどう幸せになるか、自分がどう利益を獲得できるか、といっ

た自己中心的なものではない。他者の立場に立って他者の気持ちを理解し、他者のために行動すること。これを「愛」と呼び、価値のあるものとしている。物質的に恵まれているか否かは関係ない。恵まれているのであれば、それを利用して他者に貢献できるし、そうでないとしても、世界の誰かのために何かをすることができる。里見にとっての「愛」とはこういったものであると言える。

この里見の「愛」を支えるアガペー・隣人愛・惻隠の情を検討してみると、精神医学者・哲学者 V. E. Frankl の「自己超越」を通してこれらを捉え直すことが、更なる深い理解に繋がるように思えてくる。Frankl は自己超越について、以下のように述べている。

「自己超越という言葉で私が理解しているのは、次のような根本的な人間学的事態、すなわち、人間存在はつねに自己自身を超えて、もはや自己自身ではないなにかへ、つまり、ある事またはある者へ、人間が充たすべき意味あるいは出会うべき他の人間存在へ、指し向けられているという事態である。そして、そのように自己自身を超越する程度に応じてのみ、人間は自己自身を実現するのである。すなわち、人間は、ある事柄への従事またはある他の人格への愛によってのみ自己自身を実現するのである。言い換えれば、人間は、本来、ある事柄にまったく専心し、他の人格にまったく献身する場合にのみ全き人間なのである。このような全き自己になるのは、人間が自己自身を無視し、忘れることによってである」<sup>(18)</sup>。

Frankl にとって人間は、そもそも自分以外の何ものか、大切な他者もしくは大事な仕事等へ向かっている存在である。自己満足のためにナルシスティックに他者を利用して、自己中心的に自己満足することを目標にして意識的に努力する、というあり方は、人間にとって本来的ではない。他者を愛するということは、自分を忘れ、大切な他者のために無

意識的に何かをしてしまう、他者に無意識的に専心し献身してしまっている、ということである。そしてそのように忘我的になり無条件に無償の愛を無意識的に向けることでこそ、結果的に全き自己になることができるのである。これが Frankl にとっての人間本来のあり方である。自己超越できればできるほど、結果として自己実現できる程度も上がる、ということである。

このことは人間への愛だけに限らない。Frankl にとって、人間が何らかの為すべき仕事に無意識的に専心し献身するほどに、結果としてそれだけ自己実現できるようになる。

上述のように考えてみると、里見の「愛」、それを支えるアガペー・隣人愛・惻隠の情に通底するものとして、Frankl の自己超越の概念がある、と言っているのではないだろうか。もちろんここで、アガペーや隣人愛は「神」という存在があつてのものであるが、惻隠はそうではない、という点においてこれらには決定的な違いがある。しかしながらそういった違いがあるものの、やはり自己超越によりこれらは繋がっている、と言っているであろう。

アガペー・隣人愛・惻隠の情はどれも、自己よりも他者優先であり、他者の立場に立ち他者へと注ぐ、見返りを求めない無条件で無償の愛である。その時、自己は自己自身を超えて、他者へと差し向けられていなければならないだろう。そしてその際、自己中心的に自己満足を目指しているのではなく、相手に無意識的に入り込んでいっていなければならないだろう。そして結果として、自己が実現されるのかもしれない。よってアガペー・隣人愛・惻隠の情を通して、自己超越がいわば横串を刺していると言え、したがって里見の「愛」は Frankl における自己超越的なものであると述べることができよう。

### 3. 里見の「真実」

先述したように、里見はその教育理念において「真実とは相手を思いやり、人を偽らないことである」と言っている<sup>(19)</sup>。以前筆者は「人を偽る」ことについて以下のように述べた。

「自分を偽る、ということは、実は自分が自己中心的に自己満足を得ようとしているのであるが、それをなかつたこととして、相手のために何らかの支援をしていると錯覚していることである、と言えるのではないか。相手を偽る、ということは、相手の立場に身を置くことなく、相手の全存在を理解することもできず、せいぜい部分的に把握する中で、自分は気づいていないが相手を自己満足のための道具として扱っている、ということではないだろうか<sup>(20)</sup>。「愛」を別角度から見たものとして「真実」を捉え、他者のためと自分では思っているが実際は自己中心的な態度であること、相手の立場に立っているつもりになっているが実際は自己満足の手段としていること、これらは人を偽っているのであり、真実ではない。真実はその逆であり、(前章で述べた Frankl における) 自己超越的に他者の立場に立っているものであると述べた。

里見は終戦の年に「生命の尊貴」において「真実」について以下のように触れている<sup>(21)</sup>。

戦争で街は焼けたが、そこからでも草木は成長してくる。人間もそのような草木の如く成長する力を発揮しなければならない。その成長は教育によるものである。そしてそれは親が欲するような「人工即席」の思いを押し付けて作っていく、というものではない。教育を受ける者も、大人の言うことにただ附和雷同し盲従してはいけぬ。衆愚に交わらず「自己の見識、良心の判断につとめ、自ら進んでいく人にならねばならぬ<sup>(22)</sup>」のである。世の中は虚偽でいっぱいである。国民学校2年までは純心のまま育つが、その後はいろいろ

ろと物事を取り繕い、いい加減に形だけを作り真実のありのままを見せなくなる。外部からの報酬や罰が伴わないと存在の力を発揮できないのであれば、それは自己を欺いていることになり、真実とは言えない。

里見は以上のように「真実」について述べているのだが、主語や目的語が、大人なのか子どもなのか不明な箇所が散見される。ここでは両方の意味に取って考えてみる。

里見は、1945年の日本のようなどん底の環境であっても、子どもは教育環境さえ整えば、元来持っている成長の力が発揮される存在であると信じていると思われる。そして親や教師は、報酬や罰等を通して子どもを操作しようとしてはならない。あくまでも子どもの主体性を尊重し、子どもの内発的動機づけに基づきその自由意志を発揮しやすい環境を作らなければならない。そして子どもも、その整えられた環境の中で、自由意志のもと「自己の見識、良心の判断につとめ、自ら進んでいく人にならねばならぬ」、ということなのではないだろうか。このような状態が、人間にとっての「真実」なのではないだろうか。そしてこの真実を維持することは難しい。虚偽に囲まれた環境の中、人間はどうしても附和雷同に走りやすい性質を免れない。このような真実でない状況に陥らないように、大人も子どもも自由意志の力を信じておかなければならない、ということなのであろう。

### 4. Rogers の “empathy” と里見の「愛」

里見の「愛」は決して自己中心的な自己愛ではない。他者のために自己超越的に専心し献身するものであると思われる。この愛を実践するために、心理療法家である Rogers における “empathy” と比較検討したい。

里見は「同情」「同感」「惻隱の情」等を使って、他者のために思う気持ちのあり方を示している。これらは Rogers の empathy に相当するものと思われる。empathy は現在「共

感」と訳されることが多い。一方「同情」「同感」は“sympathy”の訳語になることが多い。英語圏において、sympathyとempathyは意味が大きく異なることについてはかつて述べた<sup>(23)</sup>。すなわち、empathyは相手の立場に身を置いてその相手の感情を適切に理解していることを伝えようとしている。そして例えば「私はあなたが〇〇〇で困難を感じているのを理解している」という声かけになる。一方sympathyは、特に相手の立場には立たず、辛い思いをしているあなたを見て私も辛い、ということになる。そして声かけは「あなたが〇〇〇なのが私には辛い」となる。辛いのはあくまでも私であり、相手の辛さのありのままを理解しているわけではない。里見の「同情」「同感」「惻隠の情」等は、相手の立場に身を置いて相手の感じているように自分も感じ、その辛さを共有し、その上で何らかの支援ができるかを考え、相手のために実行する、というものであるとすれば、この里見の同情等はsympathyではなくempathyであろう。

Rogersにとってこのempathyは治療的なものである。彼は“The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change”において、次のように述べている<sup>(24)</sup>。

彼は建設的なパーソナリティ変化が生じるためには、ある条件が存在し、それが一定期間継続することが必要であると述べている。その条件は6つあって、これらが整うと、人間が元来持っている建設的に成長していく力が発揮されてくると言う。そのうちのひとつがempathyである。クライアント自身が心の中でどのように感じているか、クライアントの立場に立ってセラピストも共感的理解(empathic understanding)を経験し、その経験をクライアントに伝えようと努め、それが最低限達成されることが、クライアントの成長につながる、ということである。

上述のようにRogersはempathyを支援的なものであると捉えている。このempathyについて英語圏では、「他人の靴を履く」“put oneself into someone's shoes”という慣用句で表現することができる、ということも以前述べた<sup>(25)</sup>。自分の靴を脱いで相手の靴を履いて、相手の靴の感触を自分の足で直に感じて、相手の気持ちを理解することが、すなわちempathyであり、支援的であるということである。

このように考えてくると、里見の「愛」や「同情」「同感」「惻隠の情」は、Rogers的には心理支援において有効なものであると言うことができよう。そして栄養教諭が生徒指導ないし教育相談的な場面で児童生徒に相対するときに持つておくべき姿勢とみなしても差し支えないであろう。

## 5. Rogersの“genuineness”と里見の「真実」

では里見の「真実」はどうか。里見にとっての「偽り」は、支援する側が実は自己中心的に自己満足するために相手を支援しているつもりになっていて、本当の意味で相手のために相手の立場に立っていない、という状態を指すと先に述べた。さらに、子どもが自由意志のもと自らの態度を主体的に決定していくように成長していかなければならないにもかかわらず、それを尊重せず、しかも尊重していないことに気づかず、良かれと思って報酬や罰等で子どもをコントロールしようとしているような状態も、「偽り」であるということも述べた。では「真実」であるためにはどうあるべきなのか。Rogersの“genuineness”から考えたい。

Rogersの文献におけるgenuinenessの訳語は、「純粹」が使われることが多い。一方、例えばWEB辞書である『英辞郎 on the WEB』によると、本物であること、真性、(人の)誠実さ、率直さ、純粹さ、純真無垢さ、(書

類などの) 真正さ、とある<sup>(26)</sup>。筆者は以前訳語として「真率」を用いた<sup>(27)</sup>。Rogers は “The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change” において、The Therapist’s Genuineness in the Relationship について次の段落のように述べている<sup>(28)</sup>。

セラピストはセラピーの関係性の中において、一致し、真率で、統合されているべきである。このことは、セラピーの関係性の中で、セラピストが自由に深く自分自身であること、セラピストが自分自身の気づきによって、実際の経験が正確に表現されているということを意味する。

Rogers は genuineness について上のように述べている。自分の心のありのままに正直である状態、と言ってもいいだろう。ある人との関係性の中で、セラピスト側は心の中にさまざまな気持ちが浮かんでくる。それはセラピストにとって心地良いもの、都合の良いものであったり、心地悪い、都合の悪いものであったりする。それらすべてに正直に気づいている、すべての気持ちを真摯に経験しておく、すなわち自分自身のありのままである、という状態が、genuineness であると言うことができる。もちろん、セラピストも人間であり、Rogers も 24 時間そのような genuine な状態であるべきである、とまでは言っていない。治療関係の中において、これは求められているのである。

支援者が実は自己中心的に自己満足のために支援していて、それが良いことであると思っている時、内面的に何が起きているのか。あるいは子どもの自由意志を尊重せず、支援者が自身の価値観のみで子どもを操作している時、内面的に何が起きているのか。すなわち、里見的に「偽り」の際、Rogers 的にはどのような状態であるのか。

「偽り」である時、支援者は葛藤していない。その時の支援者の内的世界は、自分は正

しいことをしている、良いことをしている、という思いが支配的であり、そこに特に疑問を持たずにいる。あるいはこんなに良いことをしているのになぜわからないのか、と被支援者側の未熟さに怒りを抱いていることもあり得る。いずれにせよ、自分は悪くないと思っている。支援者自身にとって都合の悪い気持ちに目を向けることがない。Rogers 的には genuine でないと言える。今起きていることを全体的に見ていない。部分だけを見ている。都合の悪い部分が見えてしまうと苦しいのである。支援者が期待する結果が見えず、見返りが期待できないことにも苛立ちを覚えるかもしれないが、見返りを期待してしまっているという意識はないし、支援者側の価値観を押し付けて操作しようとしているという認識もないだろう。あくまでも支援者は正しいのであるし、もしかしたら自分は genuine であると思っているかもしれない。

ではもし支援者が genuine であった場合、その内的世界の中で何が起きているだろうか。今しようとしていることは、被支援者にとって必要なことかもしれない。しかしそれは今必要なのだろうか。もう少し先ではないか。そもそも間違っているかもしれない。しっくりこない。被支援者に響いていないのが歯痒い。何でわかってくれないんだ。しかしそれは自分が未熟だからであり、その自分の未熟さが腹立たしい。等々、さまざまな気持ちが支援者の中に湧き起こる可能性がある。これらの自分の気持ちを偽ることなく、自分にとって都合のいいことにも悪いことにも平等に目を向け、数々のアンビバレンスを避けることなくそこにいる。自分に嘘をつかず、正直であるままに被支援者と接する。その時、もし自己中心である瞬間があったとしても、子どもを操作しようとしている時があったとしても、少なくともそれに気づき修正することができるかもしれない。また被支援者も、支援者から裏切られたとってしまう可

能性は低くなるのではないだろうか。

上述してきたように、里見の「真実」のあり方を Rogers の genuineness を通して考えると、このあり方は児童生徒と教員との信頼関係を醸成し得るものになると言っているであろう。

## 6. 栄養教諭の取るべき姿勢

ここで具体的に児童生徒と栄養教諭との日常的な何気ないやり取りを仮想事例で検討してみる。

例えば小学4年生の児童Aと若手栄養教諭Bとの関係性について考えてみる。AはしばしばBのもとを訪れ、少し雑談をして教室に戻る、ということがあった。Aは休み時間に一人で本を読んだり、そうでなければ机に突っ伏して寝ていることをBは知っていた。また、給食を残しがちであることも知っていた。BはAとの雑談に応じながらも、様子が気になっていた。クラスで寂しい思いをしているのではないか。いやむしろ一人でいたいのか。3年生の時は休み時間は友だちと楽しそうに走り回っていたし、最近何か辛いことがあったのではないか。しかしクラス内に大きなトラブルはなさそうであるし、担任は特に問題視していないようである。発達上の問題もそれほど考えられない。では家庭で心理的にしんどい思いをしているのか。自分と会話している時、少しは楽しそうにしているようにも見えるが、この時少しは支えになっているだろうか。給食は残しているが、家庭では食事の様子はどのようなだろうか……。このように様々に思い巡らせながら、BはAとの雑談に付き合っていた、とする。

自分はまだ若手で、こういう時に何を言ってあげたらいいのかもわからない。下手に励ましても傷つけるだけかもしれないし、自分は担任でもない。Aに対して栄養教諭という立場から何ができるのだろうか。担任に相談してみたが、あまり取り合ってくれない。し

かしながら明らかにしんどそうである。何とかAの力になりたいが、何をしたいのかわからない。菌痒い。自分は力不足だ。ただ給食を残していることは気になるし、バランス良く栄養を摂らなければならないことは、栄養教諭として伝えることはできる。ではそれはどのタイミングでするのがいいのか。それが今の自分にはわからない。Aは保健室には行っているのだろうか。行っているとしたら、養護教諭はどのように見立てているのだろうか。養護教諭に相談することはできるかもしれないし、養護教諭とともに栄養指導的なアプローチも可能かもしれない。管理職は忙しそうにしているから、相談しにくい。まだ何か起きたわけでもないし、現段階で管理職を煩わせるのも申し訳ないが、一応耳に入れておいてもいいかもしれない。でも不安だ。自分の未熟さを痛感する。しかし子どもたちが笑顔で話しかけてきてくれることには元気ももらえるし、給食が美味しかったと言ってくれば素直に嬉しいし、ただ元気を「もらっている」ようではまだまだかもしれない、自分が子どもたちを元気にしないといけないのに、しんどい仕事だなあ、でもやり甲斐はあるかな……。このように自分自身についても色々と思い巡らせながら、Bは仕事をしていて、とする。

さて、AとBの間で何が起きているのだろうか。まずこの時点でBはAに対して「愛」があった、あるいは empathetic であった、と言っているであろう。意識的かつ積極的にAの立場に立って、Aの気持ちを理解しようとしている。もしもここで、B自身の不安を解消したいがために、すなわち自分が楽になることを、無意識的に見返りとして求め、自己中心的に接していた場合、表面的には優しい先生に見えるかもしれないが、Aは自分が理解されていると感じることはできないであろう。もちろんBがプライベートの時間では、自己愛的に自己満足を求めても何

の問題もない。A に関わっている時の B は、他者のために思う「愛」があり、empathy がある。これに A が気づくことで、B に対する信頼感が生まれ、これから何かを相談しやすい状況になっていると思われる。

また B は、自分自身の中に浮かんでくる様々な思いに目を向けることができている。自分にとって都合の悪い、意識したくない気持ちにさえも、気づくことができている。いくつかのアンビバレンスを同時に経験できている。これは、自分に正直かつ誠実であると言え、「真実」であり genuine であると考えられる。B は苦しいであろう。しかしながら、栄養教諭としての成果を獲得することのみを意識し、A の立場に立たず B のベースのみで自己満足を求めて行動し、結局 A を傷つけることになるが、B 自身の責任性には気付かないままである、といった状況は避けることができると思われる。少なくとも操作的に支配しようとすることはないであろう。「真実」であり genuine であることは、自分自身の知りたくない部分も見なければならぬので、辛く苦しいものであろう。しかし、A と B との信頼関係は醸成可能であり、今後 A は B に相談しやすくなると思われる。

## 7. おわりに

以上、短期大学創立者里見純吉における「愛と真実」を臨床心理学者 Rogers の empathy と genuineness で補強することを通して、栄養教諭が生徒指導的ないし教育相談的に児童生徒と関わる際の望ましい姿勢について検討してきた。その中で、自己超越的に他者の立場に身を置いた上で見返りを求めることなく他者を理解すること、自分自身にとって都合の良いことも悪いことも含め、真率に全体的に自己理解しておくこと、これらが肝要であることが確認できた。

ところで Frankl の自己超越をめぐるのは、人間に対する愛だけでなく、大切な仕事等、

物事に対して身を差し向けることも含まれている。そして自己超越の結果、自己が実現したり意味が充足する、といった、人生を積極的に肯定する内容となっている。里見の「愛と真実」について、この自己超越の観点から捉え直すことで、栄養教諭にとってより肯定的かつ支持的なものになり得るのではないだろうか。これを今後の課題としたい。

## 文献

- (1) 永島聡：栄養教諭に求められる哲学と心理学；Frankl、Rogers、里見純吉の観点から考える、大阪夕陽丘学園短期大学紀要, 62, 1-2 (2025)
- (2) 同論文, 8-12
- (3) 大阪夕陽丘学園短期大学：建学の精神・教育理念, <https://www.oyg.ac.jp/js/about/greeting/> (最終閲覧日 2026 年 1 月 1 日)
- (4) 栄養教諭に求められる哲学と心理学；Frankl、Rogers、里見純吉の観点から考える, 前掲論文, 1-14
- (5) 里見純吉：人間の価値 続講, 里見純吉先生講話集, 31-34 (1988), 蘭友会, 大阪
- (6) 同論文, 32
- (7) 同論文, 32
- (8) 同論文, 33
- (9) 同論文, 33
- (10) 新約聖書 新共同訳, 24 (2015), 日本聖書協会, 東京 (電子書籍版：Kindle)
- (11) 同書, 508
- (12) 同書, 260
- (13) González, J. L.: キリスト教神学基本用語集, 鈴木浩訳, 13-14 (2010), 教文館, 東京
- (14) 同書, 13-14
- (15) 宇野精一：孟子 全訳注, 90 (2019), 講談社, 東京 (電子書籍版：Kindle)
- (16) 同書, 317

- (17) 湯浅邦弘編著：中国思想基本用語集，76-77 (2020)，ミネルヴァ書房，京都
- (18) Frankl, V. E.：人間とは何か 実存的 정신療法，山田邦男監訳，岡本哲雄・雨宮徹・今井伸和訳，266 (2011)，春秋社，東京
- (19) 大阪夕陽丘学園短期大学：建学の精神・教育理念，<https://www.o yg.ac.jp/js/about/greeting/>（最終閲覧日 2026年1月1日）
- (20) 栄養教諭に求められる哲学と心理学；Frankl, Rogers、里見純吉の観点から考える，前掲論文，11
- (21) 里見純吉：生命の尊貴，里見純吉先生講話集，1-5 (1988)，蘭友会，大阪
- (22) 同論文，1
- (23) 永島聡：多文化共生社会における“empathy”と「共感」；両概念は本当に重要なのか，神戸常盤大学紀要，13，161-169 (2020)
- (24) Rogers, Carl R.：The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change, the Journal of Consulting Psychology, 21, 95-103 (1957)
- (25) 多文化共生社会における“empathy”と「共感」；両概念は本当に重要なのか，前掲論文，164
- (26) 英辞郎 on the WEB: genuineness とは，[https://eow.alc.co.jp/search?q=genuineness#google\\_vignette](https://eow.alc.co.jp/search?q=genuineness#google_vignette)（最終閲覧日 2026年1月11日）
- (27) Anderson, R. & Cissna, K. N.: プーバー-ロジャーズ対話，山田邦男監訳，今井伸和・永島聡訳，(2007)，春秋社，東京
- (28) Rogers, Carl R.: The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change, the Journal of Consulting Psychology, 21, 97 (1957)

Satomi Junkichi’s “Love and Truth” and Rogers’ “Empathy” and “Genuineness”;  
The attitude required of nutrition teachers  
in student guidance and educational counseling

Satoru NAGASHIMA

Department of food and nutrition, Osaka Yuhigaokagakuen College

Abstract

Junkichi Satomi, founder of a junior college with a nutrition teacher training program, cited “love and truth” as the founding principle of his school. Meanwhile, clinical psychologist C. R. Rogers presents “empathy” and “genuineness” as the therapist’s prerequisites for effective counseling. In this paper, I clarify Satomi’s ideas by backing them up with Rogers’ theory, and further confirm that his “love and truth” are the attitudes nutrition teachers should have when providing student guidance and educational counseling.

Keywords : Satomi Junkichi, love, truth, Rogers, empathy, genuineness

